

---

# 星色

一路

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星色

### 【Nコード】

N2150C

### 【作者名】

一路

### 【あらすじ】

人の感情がわかる主人公がある人と出会って信念を持つ、みたいな

彼は愛がほしかった。

ただそれだけだった。

他のものは何もいらぬ。

だって彼は愛がなければ死んでしまうのだから。

それが始まったのは彼が物心つく前だった。

毎年過ぎず、じめじめした夏の昼間。その時彼の母は日頃の育児の疲れ、夫がいなく独りで育てなければならぬという重圧にひどく疲れ果て、彼の行動について感情的になり、手をあげてしまった。ただそれだけだった。

それなのに彼は突然痙攣しはじめた。母はそれに見入ってしまった。突然のことだったから。彼の痙攣が生命の鼓動のようだったから。いやただ何もできなかったのかもしれない。痙攣がすぐ治まると同時に母は我に返った。

「真一、真一。」

母は彼の心臓に呼びかけた。だが問いかけに反応しない。

そして止っていた時間を取り戻すかのように彼を抱いて近くの病院に急いだ。診察の間短い髪をかきむしりながら母はずっと悔いていた。自身の人生の罪と名のつくすすべての事を懺悔した。自分のこれまでの報いがすべて我が子に向けられたかのように思えたからだ。そして願った。彼をもう一度この手で抱けることを。

不意にドアが開き医師が母を呼んだ。医師の顔を見るや否や、母は

「真一、真一は！」

「大丈夫です。安心してください。」

すると後ろから彼を抱えた看護婦が出てきた。

「診断した結果どこにも異常は無いと思います。絶対とは言えませんが健康なお子さんです。」

医師の言葉を聞き母は安心する前に混乱した。先ほどの痙攣は何だったのだらう。母は何がなんだかわからなくなった。

それから彼に対して嫌悪の念に近い物を感じたとき、似た様な出来事が何度か起こった。

だが彼が成長していくにつれ症状が和らいでいったかのように思えた。

「ねえ真一、今日会えない？」

「ごめん、この後母さんの墓参りに行かないといけないんだ。」

「そっかあ。話したいことがあったんだけど、また今度にするね。」

「ごめんね。時間できたら連絡するよ。」

「うん。わかった。バイバイ。」

5月12日。彼は毎月12日の日はいつもこの地にいる。

「そろそろ潮時だな。でも今回はもったほうか。」

軽度な木の階段を上り、道なりに緩やかな山道を登って行くと、八  
スの花が咲き乱れる野原がある。

その下に母の遺骨が眠っている。

「今年に入って2人目だよ、母さん。人間って面白いもんだね。時  
間が経つと慣れてくる。痛みにも寂しさにも、死にも。だけどそれ  
が目の前に現れたら、もがくしかない。今回の子は前の子よりも1  
カ月も耐えられた。けどもうダメだ。夜になると苦痛で耐えられ  
ない。」

ただあの症状に慣れていただけだった。苦痛であることは変わりな  
い。彼は耐えて生きてきた。この24年間を。

「やっぱり愛が糧みたい。それで負の念が死みたいなんだ。母さん  
のせいじゃないよ。これのおかげでカウンセラーになることを決め  
たんだ。あと最低で4年はかかるけどね。でもその前に次の子を探  
さなくちゃ。夢すら見られなくなっちゃう。」

彼には第六感あった。人間の感情が彼に流れてくる。そのせいで彼  
は愛を求めた。生きるために。だって誰も彼を愛さなかったら、彼  
は死んでしまうのだから。

「もしもし、明日香？今日この後空いてる？」

「空いてるけど、どうかしたの？」

「急に明日香に会いたくなってさ、会えないかなあ？なんてね。」

「真一今日どうかしてるんじゃない？」

彼女はバカにした笑い方をした。

「今大学にいるから、あと一時間ぐらいしたら平気だよ。」

「わかった。近くで待ってるよ。」

9月3日

「真一に今日紹介したい人がいるのよ。」

「どんな子？」

「その子もカウンセラーを目指しているの。そろそろ来ると思うんだけど…あつ来た来た！」

その時彼は初めて人に恐怖を覚えた。

「初めまして。吉田瑠璃です。」

その子からは何も感情が流れてこなかった。

「来るな!!！」

「えっ？」

今まで生きてきて感情が流れてこないのは初めてだった。望んではいたが。

だが突如現実として目の前に現れると、受け止めることができなかつた。

「ご、ごめん。今日ちょっと疲れてるみたい。また今度にしてくれ。」

「あつ、待って！これあたしのアドレス。よかつたらメールしてください。」

彼はそれを無言で受け取り、その場を立ち去った。

「なんだつたんだ。」

何時間たつても理解できずにいた。いや、否定していたのかもかもしれない。

目の前の恐怖を。

そしていつしか疲れと恐怖で眠りについていた。そして幼いころ、母へ宛てた手紙の夢を見た。

【なんでぼくを見てくれないの？】

こんなに母さんを愛してるのに。

こんなに母さんのためにがんばってるのに。

あどどのぐらいがまんすればいい？

あどどのぐらいがんばればいい？

あどどのぐらいいきずつけばいい？

愛してくれるならなんだってするよ。】

それは幼い恐怖心からでた手紙だった。彼を愛していたがどこか恐怖心を持っていた母親。

彼はその恐怖心を読みとり、いつか愛してくれなくなると思いこんな手紙を書いた。

そんな幼い過ちを見ているとき、電話が鳴った。

「もしもし？瑠璃です。あまりメールしない人だって聞いて、番号聞いてかけちゃった。迷惑だったかな？」

彼は夢か現実かわからないまま話を進めた。

「大丈夫だよ。こっちもメール送ろうと思ってたところ。」

「本当！よかった。嫌われたんじゃないかって思ってた心配してたんだ。だって急に『来るな！』だもん。びっくりしちゃった。」

「ごめん。最近仕事で疲れてて…。」  
「大丈夫だよ。だいたい理由はわかるし。でも思ったとおりの人だね。」

「明日香からなんか聞いているの？」

「色々だね。ねえ、今度会って話さない？」

「いいね。今はまだ忙しいから時間が空いたら連絡するよ。」

「わかった。わたしはもう4年で進路も決まってるからいつでも連

絡して。」  
電話を切り、彼はまた夢を見た。

2ヶ月経った今でも、彼は瑠璃に連絡することができていた。忙しいわけではない。時間を作ろうとすればいくらでも作れる。

ただ瑠璃に会うのが怖かっただけだった。

しかし、今日こそは会って確かめようとしていた。あの現実を。そして、

「もしもし？真一だけど、今大丈夫？」

「やっと連絡してくれたね。連絡してくれないから、私に会いたくないのかと思ってたよ。」

「それなりに時間ができてね。今からでよかったら会えるんだけど…きついかな？」

「平気だよ！じゃ場所は、私と初めて会ったあの店は？私あそこなら10分もあれば着けるんだけど。」

「わかった。10分じゃきついかもしれないけど、すぐ向かうよ。」  
「なら先待ってるね。」

店に行く途中、彼はずっとあの現実が嘘である事を願っていた。それしか考えられなかった。

そしてついに店の前まで来てしまった。

彼はひとつ息を吸い、ドアを開けた。

夕方ということもあり少し混んでいた。

中に入ったとたん彼の中にあらゆる人の感情が流れ込んできた。

それらを振り分け、彼女を探した。

だが見つからない。

感情が出ているところを見ても、彼女はいない。

不意に後ろから、

「真一君！」

彼は返事をする事ができなかった。

そしてあたかもそこに、人がいないかのようなまなざしで彼女を見

た。

不思議に思った瑠璃は、席を立ち、一步近づいた。だが真一は、一步後ずさりした。

「どうしたの？」

「いや、なんでもない。」

そしてゆっくり近づき、席に着いた。

「久しぶりだね。」

「ああ。」

「具合でも悪いの？」

「ちよつと歩き疲れただけだよ。」

「あゝ運動不足でしょ！」

「少しね。」

必死で笑顔を作った。

「初めて会ったときから色々あってね、そろそろ明日香が……」  
会話が始まったものの、彼はずつと気になっていた。

彼女が何を思っているのか。

人間と話しているというよりか、物と話しているかの用だった。

話の内容を何一つ信用できず、必死で彼女を自分の中に入れないようにしていた。

「ねえ、人の話し聞いているの？」

「えっ、あ、うん。」

「もお！」

「ごめん。」

「今何考えてるか、当ててあげよつか？」

「え？」

「『私何考えてしゃべってるんだろ？』でしょ？」

何もかも見透かされてる感じがした。

「これでもカウンセラー目指してるんだから、人間の心理には強いんだよ！」

「よく見てるね。」

「戸惑うのは解るけど、話に集中してよね。あっ！とところでさ、なんで真一君はカウンセラーになるうとしたの？」

「何でだろうね。人と接しているほうが楽なのか、心の悩みを治してあげたいのか、まだよくわかんないや。君はどうしてなるうと思っただの？」

「何でだと思っ？当ててみて！」

「ヒントは？」

「じゃあ、1、幼少期の時、お世話になったからその憧れで。

2、友達が心に傷を負ってて、それを治そうとしたのがきっかけ。

3、私人の心が読めるの。だから役に立つかな、って思っ。

さあどれでしょうか？」

「…3番？」

「真一君って以外にロマンチストなんだね。おっと、そろそろ行かなくちゃ。」

「えっ答えは？」

「次回のお楽しみ。じゃまた連絡待ってます！」

「あっ、ちよっと！」

彼女は振り返りもせず去っていった。

「…一、真一？」

「えっ、あつ、ごめん。」

「今日ずっとこんな調子だけど、どうかしたの？」

「ちよつと疲れててね。」

「無理しなくていいよ？」

「ごめん。」

女の部屋を出た真一は、ある場所へ向かった。

その途中彼は幼い日の出来事を思い出していた。

それは18歳の時である。彼は最愛の、そして彼を唯一生かし続けることができた存在を亡くした。

一人で生きていかなければならない孤独感。

動く気がしない。しかし、一人でいると死んでしまう。

そんな中、彼は恋をしてしまった。

いや、憧れに近い気持ちだったかもしれない。

彼女は清潔だった。

一点の曇りもなく、ただ正義を、自分を信じていた。

彼は近づくことができなかつた。

歪んだ感情。それは、人間の汚いところだけを見てきた結果だった。

だが以外にも、彼女の方から彼に興味を持ちはじめた。

それから簡単だった。

白ほど扱いやすい色はない。

彼はその容易さ、そして一度染まったら、純白には決して戻れないことを彼は十分知っていた。

しかし、彼は自分を抑えることができなかった。

すべて彼女にぶつけて楽になろうとした。

楽になれるはずもないのに。

それなのに彼女はその過ちさえ許してくれた。

だが、彼は気づいていた。

その日を境に、彼女が純白ではなくなっていたことを。

それは突然のことだった。

彼は彼女が変わり始めていたことに、嫌悪を感じていた。

そして彼の何気ない一言に彼女の心が離れ始めた。

するとどうだろう。

今までつき従っていた存在が、自分に興味が無くなっている。

彼は恐くなった。

一人になってしまうことが。

恐怖は脳を支配し彼の心臓を蝕んだ。

そして気づいた時には病室のベットの上だった。

「やっと目が覚めたね。」

聞こえてきた声の方を向いた。

そこには同じ年くらいの、女の子がいた。

今まであったことのない人間だった。

だが昔から知っていて、心地よい感じがした。

そして彼はまた眠りについた。

用事を終わらせ、彼は気になっていたことを解消しにいった。

「あら、真一君じゃない。」

そこは昔からお世話になっている病院だった。

「今日はどうしたの？」

「ちよつと検査に。」

検査の結果は彼にとっては幸せだったのかもしれない。

彼の心臓は恐怖によって確実に蝕まれていた。

医者からは自宅で過ごすか、入院するか選択肢を渡された。

彼は入院することを選んだ。

入院してから数日後、ある女性が来た。

それは瑠璃だった。

「調べてきたよ。瑠璃と僕の関係について。」

ずっと気になっていたんだ。」

「そう。」

「お父さんは元気なの？」

「もう死んじゃった。」

「そうか。瑠璃も僕と一緒になの？」

「真一ほどきつくないけどね。」

これからどうするの？」

「そうだ、人間って羽が生えてるの知ってた？」

「どうしたの？急に？」

やっとふたりの会話を笑みがこぼれた。

「人間って生まれた時から羽が生えてるんだ。」

いや、羽から人間が生まれてくる。」

それは永遠に消えることなく、常に存在している。  
みんな羽の大きさはバラバラなんだけど、大きくなくちゃ空を飛べないんだ。

この世界は一日中曇っていてね、一生晴れないんだ。  
羽が大きい人はある程度まで大きくなったら、雲の上に飛んで行ってしまう。

小さい人は大きい人に嫉妬し、貶し、上の世界に興味すら持たない。  
そして羽が大きい人は小さい人の羽を大きくする。  
その結果羽が大きくなるんだ。」

「上の世界って？」  
と、瑠璃が興味をもった。

「晴れているんだ。」  
「それだけ？」

「ああ。だけど簡単には上に行けないんだ。  
雲の中を通らなくちゃ行けない。  
こいつが厄介だね。下手すると羽が小さくなって下に落ちてしまう。  
一人で行く人もいれば、複数で行く人もいる。  
全員行けるわけじゃないけどね。」

「上にいる人は何してるの？」  
「雲の中に落ちないように飛び続けている。  
自分から下の世界に行く人もいるけどね。  
そして一生に何回か羽を落とすんだ。  
それを下の世界にいる人が拾う。」

「拾うと？」  
完全に瑠璃はその話のにめり込んでいた。  
「羽が大きくなる。」

光を浴びた羽は不思議な力があるんだ。」  
「なるほど。それで真一は羽を落としたいの？」  
「近いけど、ちょっと違うな。」

さらにその上に飛んで生きたいんだ。」

「まだ上があるの？」

「ああ。」

「どういう世界？」

「診察の時間です。」

看護婦さんが入ってきた。

「今日はここまで。」

「えっ、ちよつと！」

「話はまた今度。」

「明日もまた来るから！」

「いいけど、明日はいないよ。」

「なんで？」

「上に飛び続けることに決めたんだ。」

その日は12日だった。

なぜか痛みが和らいだ気がしていた。

「遂に私だけになっちゃったね。」  
退院してから一ヶ月後、真一は自身の全てを人に語り、語り、そして誰からも理解されず羽を落として一生を終えた。

「お父さんとお母さんが私たちを生まなかったら、離婚しなかったら、愛されてなかったら…。」

こんな想いしなくて済んだのかな？

せつかく仲良くなれたのに。

やっと出会えたのに。

ねえ。真一、知ってた？

光って暗い所じゃないとわからないんだよ。

だから今は暗くていいんだ。

だっていつかは見つけられるもん。

暗ければ暗いほど私たちを照らしてる光を見つけられる。

そりゃ恐くて目をつむっちゃう時だってあるよ。

躓いて転ぶ時だってあるよ。

でも前見て歩いていればいつか見つかる。

見つかったらうれしいんだろうな。

きつと温かいんだろうな。

私たちもいつかは誰かを照らせるかな？

照らしたいな。

だから今は暗くていいんだ。

だってこの雲を抜けたら青空が見れるんだから。」

「ありがとう。」

真一は死ぬ以前にある少年と出会っていた。

その子はいつもひとり公園の入口の所に座っていた。

ある時真一はその子に尋ねた、

「いつもそこにいるけど、友達と遊ばないの？」

その子は無邪気に笑い、答えた。

「ぼく、友達いないんだ。

病気でたまにしか学校に行けてなかったから。」

「お兄さんが友達になるうか？」

「うれしいけど、ダメだよ。」

「なんで？」

「だってお兄ちゃんそんな大きい羽着けてるじゃん。

ぼくと遊んでたらダメだよ。」

真一は偽りのないその少年に聞いた。

「君には羽が見えるの？」

「うん。でも内緒だよ。」

またママに叱られるから。」

「そっか。なら空を自由に飛べるぐらいの大きな翼だといいな。」

「何いつてるのお兄ちゃん。」

もう自由に飛び始めてるじゃん。」

混じり気のない瞳に問いかけた。

「君には一体何が見えてるの？」

「だから羽が見えるんだって！」

あつ、でも気をつけてね。

お空の上まで飛んでいこうとしちゃダメだからね。

眩し過ぎて目が見えなくなっちゃうから。

それにイカロスみたいになっちゃうよ。」

その時一台の車が隣に止まった。

「真悟、病院に行くわよ。」

「ママが迎えに来た！」

じゃあまたね。」

「ああ。また今度な。」

それから真一はただ曇った空を眺めていた。

「鳥みたいに大空を飛びたい。

月みたいに世界を照らしたい。

太陽みたいに輝きたい。

尊敬される人になれたら。

人に希望を与えられたら。

虚無感から抜け出せたら。

いつになったら飛べるんだろう。

飛ぶ理論を語れてもね。

「やっぱ飛ぶためには泥にまみれて羽ばたかないと。」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2150c/>

---

星色

2010年12月11日02時42分発行